

器楽教育に関する一考察

柏瀬 愛子・佐地 多美

森久見子・伊藤 充子

A Study on Instrumental Music Education

Aiko KASIWASE, Tami SAJI

Kumiko MORI and Mitsuko ITOH

緒 言

幼稚園教育要領並びに小学校指導要領の改訂に伴い、子どもの豊かな感性を育むことが強調された。これを受けて、音楽教育は全人教育を目指すものとして一層重要な役割を持つものとなった。しかし、現実では幼稚園、小学校ともに「音楽指導が不得手だ」という教師が多く、そのほとんどは「弾けない、歌えない」を原因としている。

本学では、いままで「音楽指導に強い教師を養成する」という目標をもってカリキュラムが構成されていた。なかでも器楽教育（本学教科名「器楽」はピアノ実技である。以後これを器楽指導という）においては、ピアノを不得手とする学生のためにその原因を解明し、効果的な指導をいろいろな角度から研究しながら、実践、反省を重ねてきた。その結果は過去4回、本学紀要に報告してきた。現在の器楽指導は「教員養成課程をもつ大学における音楽教育の一考察（その4）名古屋女子大学 紀要 第27号 昭和56年3月（以下第4報という）で報告した授業内容をもとに、毎年一部修正を加えながら実施しているものである。

家政学部児童学科の改組により発足した、文学部児童教育学科も、本年完成年度を迎えた。この学科改組に伴い組み直しされたカリキュラムによって、音楽教科の中では「声楽」と「器楽」のカリキュラムが変更された。これによって両科目は履修条件が緩和され、履修期間も大幅に削減された。我々は、この新カリキュラムにもとづき「器楽」指導をしてきた結果、学生の状況から次の点が心配される。

- 1) 教育現場に出たとき音楽指導に困らない指導者となりうるであろうか。
- 2) 児童学科時代と同じような音楽指導技術を身に付けさせることが出来たであろうか。

本研究は、上記問題点を踏まえた上で、解明に向けての歩みだしとして「器楽」履修を終わった学年を対象に「器楽履修に関する調査」を行い、その結果を参考に短期間で効果をあげることが出来る器楽指導の方法について検討、今後の授業の方針を追究するものである。

カリキュラム 対比

家政学部児童学科時代と文学部児童教育学科の音楽教科内容

表1) 表2) は両学科のカリキュラムが、どのように変更されたかを示すものである。本文では「器楽」だけを取り上げて追求するが、参考までに音楽関係の全教科を示す。

1 教科内容と開講学年

表1) 家政学部 児童学科 児童教育専攻 音楽関係教科のカリキュラムと開講学年

系 列	科 目 名	単 位 数		週 時 間 数					
		必	選	1 年		2 年		3 年	
				前	後	前	後	前	後
専 門 教 育 科 目	音 楽 理 論	2		2					
	内 容 研 究 音 楽 声 楽	2	2	2	2	2	2	②	②
	器 楽	4		2	2	2	2	2	2
	教 材 研 究 教 材 研 究 音 楽	2						2	2
保 内 研 究 音 楽 リ ズ ム		2					2	2	

(注) 3年次の②は、昭和46年度家政学部児童学科発足当時におかれていたものであり昭和50年度入学の学生まで適用されたものである。この間「声楽、器楽」とともに1年半の履修で2単位が認定されていた。51年度入学生より「声楽」に関しては、履修期間が短縮され1年単位となった。

表2) 文学部 児童教育学科音楽科目カリキュラムと開講学年

系 列	科 目 名	単 位 数		週 時 間 数					
		必	選	1 年		2 年		3 年	
				前	後	前	後	前	後
専 門 教 育 科 目	音 楽 理 論	2		2					
	教 科 に 関 す る 専 門 科 目 声 楽		2	2	2				
	器 楽 I	2	2			2	2		
	器 楽 II							2	2
教 専 職 門 に 科 関 目 す る	教 材 研 究 材 究 音 楽	2						2	2
	保 育 の 内 研 容 の 究 幼 児 の 表 現 (音 楽)		2					2	2

器楽教育に関する一考察

この表で「声楽，器楽」欄を比べてみると，単位数の上では「声楽」で必修2単位が削減された他は，あまり変化がないように見える．しかし「器楽」の必修4単位が分割され，選択が入ってきたこと，履修期間が1年間短縮されていることは，大きな違いであろう．もっとも，家政学部時代の単位認定の方法が変則的であったことは否めないことであるが，自発的には練習をしようとする学生にとって，決められた授業のもとでピアノを弾くという期間が，少しでも長く置かれている方が望ましいのではないかと思う．

この他に，専門教育科目ではないが一般教育科目としての「音楽」が新たに文学部に置かれたことは（一年次 選択＝前後期 4単位）感性教育の上では好ましいことである．

2 科目別履修状況（受講者数）

家政学部児童学科の科目別受講者数については，最終学年（平成3年3月卒業）を，文学部児童教育学科については，開講以来のものを記載する．なお，必修科目は省略した．

表3) 家政学部 児童学科 児童教育専攻（昭和62年入学）の履修状況

科目\学年	1年	2年	3年
声 楽	必	110/115 (95.6%)	
音楽リズム			112/115 (97.4%)

(注)
表3), 表4) の数は受講数/
在籍数を示す.
「器楽」は必修のため省略.

次の表4) 昭和63年度入学生「器楽」受講者数は，3年終了時点の単位認定者数である．「器楽」が選択になって初めての学年であるだけに，我々は出来るだけ全員が受講してくれることを願っていた．前期の時点では，受講者数95%（再履修者を含む）と好調であったが，後期に入り教育実習やゼミナールの開講によって忙しくなり，練習が追いつかないという理由から放棄してしまう者が出だす一方，4年次に持ち越し現在も練習に励んでいる者もいる．恐らく今年度の3年生も，単位認定の時点ではパーセンテージが下がるのではないかと懸念される．なお，平成元年度以降の入学生の履修状況は開講途中であるが，参考までに記載した．

表4) 文学部 児童教育学科の履修状況

入 学 年 度 科目\学年	昭和63年度入学			平成元年入学			2年入学
	1年	2年	3年	1年	2年	3年	1年
一 般 音 楽	61/61 (100%)			30/52 (57.8%)			50/50 (100%)
声 楽	51/61 (83.6%)			52/52 (100%)			39/50 (78%)
器 楽		必	40/60 (66.7%)		必	47/51 (92.2%)	
音楽リズム			62/62 (100%)			50/50 (100%)	

3 器楽に関する授業内容

昨今、幼稚園や小学校の教師には高度な音楽諸能力が要求されていることから、本学では「より多くの音楽知識と高度な演奏技術を身につけさせたい」という姿勢をもって器楽指導に当たっている経緯は、これまでも本学紀要に度々報告してきた。今回ここに記載した児童教育専攻の授業内容(表5)は、第4報(189頁 表1)で報告したものを更に改善し実施していたものである。また(表6)は、現在児童教育学科の学生に実施している授業内容である。いままで3年間で行ってきた内容を削減することなく2年間に組み入れ、しかも必修年次に一応の基礎的演奏技術が習得出来るように配慮してある。

表5) 家政学部 児童学科 児童教育専攻の器楽授業内容(昭和62年入学者に適用)

1 年		2 年		3 年	
前 期	後 期	前 期	後 期	前 期	後 期
① College Piano Method (Beyer)			① March 指定曲を(C. D. F. G Dur)に移調		
② Scale & Cadenza (C, D, E, F, G, A, B Dur & a moll) 2 オクターブの上, 下行と Cadenza			上記以外に任意3曲以上		
③ 新曲 指定 20曲			② 伴奏付け(Step 1-8)		
④ Czerny-30 No 1-10			音楽リズム教材集の課題にて		
			③ 弾き歌い 小学校唱歌共通教材18曲		
			④ 自由曲 Sonatinen 程度2曲		

(注) 指定日までに課題を終了した場合、試験を受けることが出来る。なお、課題はできるだけ①から順番に行うよう指示する。試験は前期(9月)後期(1月)に実施。

表6) 文学部 児童教育学科の器楽授業内容

昭和63年度入学	2 年 (必修)	3 年 (選択)
(Beyer) 4月に試験, 合格者は次の課題より始める		① 初見, 伴奏付け, 弾き歌い (幼児歌曲集より20曲)
① Scale & Cadenza (C, D, E, F, G, A, B, Es Dur & a. c moll)の2オクターブ上, 下行と Cadenza		② 弾き歌い (小学校歌唱共通教材24曲)
② Czerny 30 任意5曲以上		③ 自由曲 Sonatinen 程度
③ March 指定曲の移調 C, D, F, G Dur 他に任意2曲		
④ 自由曲 指定教本より (Burgmuller 25 または カレッジ・メソード曲集編)		
平成元年度入学	2 年 (必修)	3 年 (選択)
(Beyer) 4月に試験, 合格者は次の課題より始める		① 初見, 伴奏付け, 弾き歌い (幼児歌曲集より20曲)
① Scale & Cadenza (C, D, F, G, B Dur & a moll)の2オクターブ上, 下行と Cadenza		② 弾き歌い (小学校歌唱共通教材24曲)
② Czerny 30 任意5曲以上		③ 自由曲 Sonatinen 程度
③ March 指定曲の移調 C, D, F, G Dur 他に任意3曲		
④ 自由曲 指定教本より2曲以上 (Burgmüller 25 または 18)		

器楽教育に関する一考察

この授業内容は、上段＝昭和63年、下段＝平成元年に入学した学生に適用したものである。受験資格は必修、選択ともに指定日までに課題を終了しなければ得られないことや、課題の指示などは家政学部時代と同様であるが、試験は年4回6月、9月、11月、2月に実施した。なお、2年次で課題が終らず受験出来なかった場合は、3年次で履修修とした。その者が選択の2単位を取得希望する場合は、4年次で履修させるようにした。

表に示されている(Beyer)4月の試験は文学部発足に伴い、いままで1年次から開講されていた「器楽」の授業が2年次からの開講となったため、入学後の学生に対して「器楽」の必要性を説き自習することを指導していた。そこで、その結果をみるためのものである(この試験に合格した者は①の課題から始めることができる)

このような方法をとったのは、履修期間の短縮(3年間→2年間)から生じる時間の不足を解消するため、演奏力をもっている者には現場で役に立つ教材研究的な経験を多くもたせ、また、初心者に対しては、少しでも長いレッスン時間を与えたい、などの理由からである。

世間一般には、わが国の経済が高度成長し始めた頃から、音楽人口が急激に増えだしたことに伴いピアノを弾く者も多くなってきたと思われる。我々もこうしたことから履修期間の短縮や2年次からの開講に対して、懸念は持つもののやむを得ないこととして受け止めてきた。しかし、学生の実状は年ごとに鍵盤楽器(ピアノ、オルガン、電子楽器等)の未経験者が多くなる傾向にある。また、その年度によっても異なるが演奏技術はさまざまである。経験があっても変な癖を持っていたり、読譜に手間どるなど、練習にかなり時間を費やし苦勞する者も少なくない。一方、既に十分な演奏技術を身に付けている者も見られることから、前述した授業内容の設定や試験方法には十分配慮しているつもりである。

器楽履修に関する調査

調査理由と内容

文学部児童教育学科の発足に伴い「器楽」の履修期間等に変更があったことは前述の通りである。そこで、「器楽」履修に関し新カリキュラムを含め学生がどのような意見や感想を持っているかを知るために調査を実施した。

- ① 対象：「器楽Ⅰ」必修、並びに「器楽Ⅱ」選択の履修が終了した文学部1回生60名。
未だ履修途中ではあるが、参考資料とするために2回生48名。
- ② 方法：質問紙法
- ③ 調査時期：1回生 平成3年6月27日、2回生 平成3年7月9日
- ④ 調査内容と集計結果：表7)
- ⑤ 調査結果の分析

アンケートの集計結果から学生の意見や感想を分析すると以下のようなようになる。

I 開講時期等については、1年次からという意見が半数以上を占めている。また、履修期間に関しては現行通りの2年間でよいという者が半数を占める一方、期間延長を要望している者もかなりいた。この意見を受けとめるならば、以前の1年から3年まで開講という形に戻すことも考えるべきであろう。

II レッスン方法については、1コマの中に割り当てられている人数が多いと感じている学生が半数を占めていた。これは初年度、1コマの中で1人の教師が15名の学生を担当したことに起因していると思われる。「何人位がよいか」という問いに対しては、5－8人位という答えが一番多かった。表8) 現行の教師1人の配当(9－11人)を想像して答えていると思われる

る。「毎回のレッスンに満足しているか」の問いに対しては、1人当りのレッスン時間が短いことだけでなく、自分の練習不足も手伝って、満足は得られなかったようだ（なお回答のパーセンテージが高いのはⅡの3で口と答えた人数を分母としているためである）

Ⅲ 試験については、年4回制の試験は自分で計画を立てて受けられるという気持ちを持つ一方、いつも試験に追われていると感じているようであった。また、課題終了者に対するレッスン免除制度の導入を希望する意見も多く聞かれた。一考すべき問題であろう。

Ⅳ 課題等の質問に対しては、現行の内容を適当とみている者や、多いと感じている者、内容が高度だと答えている者が多くみられた。また、「グレード制をつくり課題の内容を変えてもよいのではないか」という意見も寄せられていた。この点も今後の課題として検討しなければならないだろう。

Ⅴ ピアノの学習経験については、未経験者が30%を占めている。経験者の習っていた期間や時期は小学生時代が多く、それも学年が上につれやめてしまう傾向にあった。また、習っていた年限は6-10年位という答えが多かったが、授業開講当初に行った試験の実力から見ると、うなずけないものがある（なお、習っていた期間の表9-1）では、総人数が在籍数よりかなり多くなっている。これは3歳から習いはじめ7歳でやめた場合、その間の各年齢欄に計上したからである）未経験者に対する自習勧告はかなり効を奏し、何等かの形でほぼ全員が自習したと答えている。しかし、これも開講当初の試験で不合格者が多く出たことから見て、自習方法を考えなければならないだろう。

最後の「ピアノを弾くことは楽しいですか」という問いに対し、約80%の者が楽しいと答えている。しかし、「どちらともいえない」「つらい」と答えている者が20%もいることは改めて器楽授業の難しさについて考えさせられた。

表7)「器楽履修に関する調査」の調査内容と集計結果

設 問 事 項		回 答 数	
		4 年	3 年
I 授業（器楽）の開講時期・期間・単位について			
1 開講時期	イ 現在の通り2年次からの開講でよい	20/33%	24/50%
	ロ 1年次から開講される方がよい	38/63%	24/50%
	ハ 専門科目であるから3年次開講でもよいと思う	-	-
	ニ その他	1/ 2%	-
2 履修期間	イ 必修、選択を通して現行通りの2年間でよいと思う	31/52%	30/63%
	ロ 必修、選択を通して現行通りの2年間では短いと思う	5/ 8%	3/ 6%
	ハ 長いと思う	-	-
	ニ 履修期間を延長し3年間にすべきだ (必修2年間、選択1年間)	11/18%	10/21%
3 単位数	ホ 1年次から4年次まで常時開講されているとよい	8/13%	5/10%
	ヘ その他	4/ 7%	-
	イ I (必修) II (選択) の区別がある方が分かりやすい	40/67%	18/38%
	ロ I, II の区別はあってもよいがいずれも必修とすべき	6/10%	6/13%
ニ 必修と選択の別を各年次とも半期にするとよい (半期1単位)	ハ I, II の区別に関わらずいずれも選択でよい (教員免許を取らない場合)	11/18%	19/40%
	ホ その他 (無回答者を含む)	1/ 2%	3/ 6%
	ロ	-	2/ 4%

器楽教育に関する一考察

表7)「器楽履修に関する調査」の調査内容と集計結果(続き)

設 問 事 項	回 答 数	
	4 年	3 年
Ⅱ レッスン方法		
1 1コマの中で1人の先生が担当する学生数	イ 多い 27/45%	26/54%
	ロ 普通 29/48%	19/40%
	ハ 少ない 1/ 2%	3/ 6%
2 1コマの人数は何人位がよいとおもうか(別表8に示す)		
3 毎回満足するレッスンを受けることが出来たか		
	イ できた 13/22%	9/19%
	ロ 出来なかった 16/27%	2/46%
	ハ どちらとも言えない 28/47%	17/35%
4 3でロと答えた人に対する質問		
	イ 自分の練習不足 * 16/27%	12/55%
	ロ レッスン時間が短いた * 8/13%	13/59%
	ハ レッスン時の体調 * -	1/ 5%
	ニ 指導者との意志疎通 * 2/ 3%	1/ 5%
	ホ 曲の好み * 1/ 2%	2/10%
	へ その他 * -	-
5 1年あるいは半期で担当者が交代することをどう思うか		
	イ いろいろな先生と出会えてよかった 14/23%	8/17%
	ロ 新しい先生に馴染んだところで交代するのはいやだった 14/23%	16/33%
	ハ 担当者が交代することは ① 良い 3/ 5%	7/15%
	② 悪い 11/18%	4/ 8%
	③ どちらとも言えない 19/32%	13/27%
	ニ その他 5/ 8%	-
Ⅲ 試験について		
1 開講当初に行ったバイエル認定試験に関して		
	イ 未経験者なので試験をされたことは困った * 11/18%	11/23%
	ロ 経験はあったが、練習してなかったので困った * 7/12%	6/13%
	ハ 自分で練習していたが思うように弾けなかった * 19/32%	16/33%
	ニ 経験もあり、練習も十分したので自信があった * 2/ 3%	2/ 4%
	ホ キャリヤが長いのでバイエルの演奏には自信があった * 3/ 5%	-
	へ 試験はしてもよいが2-3回レッスンをしてからがよい * 22/37%	17/35%
	ト その他 1/ 2%	-
2 年4回の試験制度をどのように思うか		
	イ 自分で計画を立てて受験出来るのでよかった * 23/38%	14/29%
	ロ いつも試験に追われているような気がしていやだった * 14/23%	14/29%
	ハ 次の課題に進むと前の課題を忘れそう。年4回はよい * 4/ 7%	* 5/10%
	ニ 全課題終了者には、レッスン免除の制度があってもよい 21/35%	19/40%
	ホ その他 4/ 7%	-

表7) 「器楽履修に関する調査」の調査内容と集計結果 (続き)

設問事項	回答数		
	4年	3年	
IV カリキュラムについて			
イ 課題の量は適当だった	* 11/18%	18/38%	
ロ 課題が多すぎて消化するのに大変だった	* 25/42%	15/31%	
ハ 課題が少ない。もっと沢山あってもよい	-	-	
ニ グレード制をつくり課題の内容を変えてもよいのでは	* 23/38%	15/31%	
ホ 課題は概してやさしかった	-	-	
ヘ 課題が難しく、ついていくのにとっても苦労した	* 9/15%	4/ 8%	
ト その他	1/ 2%	-	
V ピアノ歴について			
1 大学に入る前にピアノを習ったことが	イ ある ロ ない	41/68% 10/17%	33/69% 15/31%
2 ピアノを習ったことはないが他の楽器を習ったことがある	オルガン エレクトーン バイオリン その他	1/ 2% - - 8/13%	1/ 2% - - 3/ 6%
3 ピアノを習った期間と年限 (別表9に示す)			
4 1年のとき言われた自習は	イ した ロ しなかった	34/57% 2/ 3%	48/100% -
5 4でイと答えた人に対して	イ 大学の先生にみてもらった ロ 大学で友達にみてもらった ハ 大学の先輩にみてもらった ニ 学外の先生にみてもらった ホ 学外の友達や先輩にみてもらった ヘ ピアノを習った経験のある家族にみてもらった ト 全くみてもらわなかった チ その他	* 3/ 9% * 7/21% - * 9/26% * 2/ 6% * 3/ 9% * 14/41% 2/ 6%	- 2/ 4% - 11/23% 1/ 2% 1/ 2% 1/ 2% -
6 4でロと答えた人に対して (3、4年共に回答者なし)			
VI ピアノをひくことは	イ 楽しい ロ 楽しくない	49/82% 9/15%	35/73% 13/27%

表8) 1コマに入る人数は何人位がよいと思うかの問いに対して学生が希望した人数

希望人数	3人	4人	5人	6人	7人	8人	9人	10人
4年	-	2/4%	17/30%	11/20%	18/30%	10/18%	4/7%	7/12%
3年	1/2%	-	8/17%	15/31%	10/21%	8/21%	5/10%	5/10%

表9-1) ピアノを習った期間

年齢/学年	4年	3年	4年	3年	4年	3年		
3歳	4/10%	1/ 3%	9歳	32/78%	25/75%	15歳	14/34%	10/30%
4歳	9/22%	4/12%	10歳	31/76%	27/81%	16歳	11/27%	7/21%
5歳	20/49%	9/27%	11歳	30/74%	26/78%	17歳	9/22%	6/18%
6歳	28/68%	19/57%	12歳	28/68%	23/69%	18歳	7/17%	5/15%
7歳	33/80%	23/69%	13歳	22/54%	13/39%	19歳	3/ 7%	2/ 6%
8歳	32/78%	22/66%	14歳	18/44%	12/36%	現在	4/10%	-

表9-2) ピアノを習っていた年限

年齢/学年	4年	3年	4年	3年	4年	3年		
1年間	2/ 5%	2/ 6%	6年間	3/ 7%	4/12%	1 1年間	1/ 2%	1/ 3%
2	2/ 5%	4/12%	7	4/10%	3/ 9%	1 2	2/ 5%	1/ 3%
3	4/10%	4/12%	8	6/15%	4/12%	1 3	2/ 5%	2/ 6%
4	3/ 7%	2/ 6%	9	6/15%	-	1 4	-	-
5	2/ 5%	1/ 3%	1 0	3/ 7%	5/16%	1 5年以上	1/ 2%	

考 察

1 調査結果から

今回行った「器楽履修に関する調査」の結果分析を踏まえたうえで、まず授業内容の充実に関する考察を持ちたい。

学生のピアノ奏法を向上させ、それが音楽全般の指導力につながるような授業内容の作成を考えると、次の点を基本的な認識としておきたい。

- ① ピアノ奏法は知識だけで体得出来るものではない。理論的な知識を裏付けとして、常に実践を積み重ねることにより習得出来るものである。従って、よりよい奏法を身に付けるためには、長期の習得期間と適切な指導を受けることが望ましい。とくに初心者には絶対必要なことであり、それも出来るだけ早い時期に始めるとことが効果を大きくする。
- ② 現代の学生気質は一般的に見て、すべてに意欲が乏しく忍耐に欠けている。従って、根気のいるピアノ練習などはその必要を認めなければ、なかなか自主的に練習しようとしにくい。
- ③ 上記②の必要性を明確に意識しだすのは、小学校実習（3年次）や幼稚園実習（4年次）の体験からである。

新しい教育内容を作成するに当たり、まず何よりも大きな問題となってくるのが履修期間である。理想は、在学4年間を通して何等かの形で履修時間を持つことであるが、現実には不可能なことであろう。ならば家政学部時代と同様、1年延長して3年間（1年から3年）に出来ないだろうか。以下にいろいろな履修方法を提案する。

3年間履修の場合

- イ) 3年間必修（家政学部 児童学科 児童教育時代と同じ）
 ロ) 1, 2年必修 3年選択 ハ) 3年間選択 但し免許必修とする

2年間履修の場合

- ニ) 2年間必修 ホ) 1年必修 2年選択（現行）

我々の希望はイ) とすることであるが、不可能ならば現行の2年間で実施していかなければならない。この場合現在の必修、選択各1年づつを、ニ) の案に改め、現在の7-9分と非常に短い指導時間を、15-20分とし時間的ゆとりのある指導を実施していきたい。実行に移されれば、1教員が1コマで担当する学生数を現在の9-11人から5-6人としなければならない。このことは、学生の希望にも応ずることである。

「器楽」の授業開講が2年次からであることは度々触れていることである。そのため、1年次を自習期間として課題を与え各自練習を行うように指導している。さらに、学生の自習方法と進行状態を把握したうえでアドヴァイスを与えるなどしている。また、いつでも学内の教員から指導が受けられるような体制も整えているが、指導を受けにくる者は少ない。今後、より

効果的な自習が行えるよう一層徹底した指導をすることが肝要であろう。

授業内容は履修期間短縮に伴い毎年改善してきたが、よりよいものとするためには今後も必要とあれば改善していかなければならない。しかし、履修年限など現行通りであるならば、授業内容の量、質ともに大きく変化させることは出来ない。但し、グレード制を導入する場合には大幅な変更が考えられる。この問題については、以前の経緯を参考として検討しているが、未だ実行出来るまでに至っていないが、出来るだけ早期に解決しなければならない。

試験は今後も現行の年4回制を実施していく予定である。また、全課題の試験合格者に対する授業免除のことも目下検討中であるが、この方法を実行に移したとき案じられる問題としては①「早く受験して免除を」と望む学生と「引続き学習させたい」と思う担当者との間に起こる気持ちのうえでの行き違い。②担当者により受験資格の獲得に差があった場合、学生間で比較し合い、不満をもつようになるのではないかなどの点があげられる。これらのことを回避するためには、免除に対する明確な基準を設けることと、担当者間で学生の状況など常に話し合うことが必要であろう。

以上、教育内容を見直すための必要事項を取り上げてみたが、最初にも述べたように、新しい授業内容作成の元となる履修期間をまず決めなければならない。

2 今後の課題

文学部完成年度を迎え、各学科ともに全体的なカリキュラムの見直しが提起されている。この際、児童教育学科としての特性を強調するならば、専門教科目のそれぞれが専科として通用するような力が付けられるカリキュラムとしたい。特に専門性の強い音楽は、かつて専科教員として採用されることもしばしばであった。これからもその可能性を持たせたい。そのためには、音楽に強い学生を育てていかなければいけない。となると何度も言うように履修期間を延長するか、もしくは2年間の免許必修としたい。また、開講時期は、初心者にとって「1年の遅れは、手、指の関節が年を追うごとに硬くなり、その動きが鈍くなっていく」と言うことを心したとき1歳でも若い、すなわち1年次からが望ましいと言えよう。

授業内容については、検討中であるグレード制の適用に踏み切りたいと思う。そこで、現行の履修期間(2年間)を例として1試案を述べてみたい。なお、グレード・コースは4段階位が適当と思われる。

- ① 自己申請 入学時に調査用紙を配布。鍵盤楽器既習状況を記入してもらう。
 - ② 自習期間中の課題提示 (Beyer：現行通り)
 - ③ 「器楽」授業開講、第1回目のとき公開試験を実施 (現行通り)
 - ④ 認定試験に合格した者は、掲示されている課題内容を見て、自分の技量に合っていると思うコースを自分で選び申告する。不合格者は自動的にAコースとし、基礎的な練習曲を含め学生が知っていて興味を持つような曲(例えば おうまの親子、きらきら星など親しみやすい曲)を与える。
- なお、課題として (Beyer) を扱う理由は、公立の幼稚園教員並びに小学校教員の採用試験で器楽実技が実施されるとき、課題曲として指定されるからである。
- ⑤ コース別一覧 (課題内容については省略する)
 - A 初級 第1課程 (全くの初心者を対象とした内容)
 - B 初級 第2課程 (経験はあるが技法に欠ける者を対象とした内容)
 - C 中級 (ある程度技法は身に付けているが、未だつたない面が多い者を対象とした内容)
 - D 上級 (かなり高度な技法を身に付けている者を対象とした内容)

⑥ 試験はコース別課題とし、必修単位の認定は少なくともBコースを終了しなければ認められない。選択単位ではCコースを終了することを条件としたい。なお、最初からDコースを選択した者が試験で不合格となり、1コース下げることが願い出て来た場合は認めたい。念のため、グレード制のレッスンをしている他大学の方法を調べてみた。課題内容の程度に格差はあるが、ほぼ同様の方法が取られていた。

音楽はその文字が示すように、楽しくなければならぬ。苦痛を感じながら練習しても決して上達するものではない。とくに技術的に未熟な初級コースに対しては「こんな曲が弾けるようになった」という喜びを持ち、練習の励みになるような課題を与えていきたい。

次に本学としては全く新しい授業構想を述べてみたい。この方法は既に多くの教員養成系の大学、短大で実施されていて、従来からの個人レッスンと合わせて運用されたとき、短期間でかなりの効果を上げることが出来ると聞く。その方法とは、電子楽器による集団レッスンである。一般的にEML (Elepian Music Labolatory) と呼ばれ、ピアノとしての練習だけでなく、教師として知る必要のある鍵盤和声、伴奏法、対位法、分担奏、アンサンブルなどあらゆることがグループで学習出来るので、みんなで学習することの楽しさやよい意味での競争心を持たせることも出来る。現在行っているレッスン方法の場合、教師と直接関わり合いが持てるのは、1コマの中でせいぜい10分位のものであり、後の時間は自分で学習することになる。器楽授業で自分がレッスンを受ける時間外は「練習をする」と約束されているが、ピアノ台数の不足も手伝い、レッスンがすんでしまえば遊んでしまう者も少なくない。EMLによる集団レッスンは、長時間教師と関わり合いを持つことができる。また、個人的な練習をはじめ、グループで演奏をすることも出来る。MIDI端子にシーケンサーを接続して、自分の演奏を録音し、音や奏法の誤りをチェックしたり、教師の模範演奏に合わせることも出来る。

運用方法としては1クラスを半分に分け、集団レッスンと、個人レッスンを交互に行い、お互いのレッスンで欠けるところを補いあっていけば「器楽」の履修年限が短くても、かなり学習効果を上げることが出来るのではないかと思われる。しかし、この方法を取り入れるためには施設設備の拡充が必要となってくる。従って、その準備がない場合すぐ実施に移すことは出来ない。しかし、今後教員養成の音楽教育「器楽」では、こうしたシステムの導入傾向がますます強くなっていくと予想される。その理由は先に述べた教育効果が高いことと、いま1つ、小学校にも近年同じような電子楽器が導入されているので、指導法や扱いを教えておこうという計らいもある。社会状況を踏まえそのニーズに応え、本学でも近い将来この方法が導入出来るように設備を整え、充実した「器楽」授業が行えるようにしていきたいものである。

今回は、在学生の調査意見で器楽授業の方法や内容についていろいろ述べてきたが、現場に出た時、その指導に困らない力を持たせるためには、現場で教えている卒業生に情報の提供を依頼する必要があると思う。卒業生から在学中の学習で活かされていること、不必要だったこと等など腹藏のない意見を聞かせてもらい、今後の授業内容改正の参考とするべきであろう。履修年限が短縮された文学部第1回の卒業生が現場に出たら、早速調査を依頼したい。

要 約

幼児教育や学童教育の中で音楽教育は「豊かな感性と情操を育てる」という全人教育を目指す重要な課題を担っている。

昭和63年、文学部の発足に伴うカリキュラムの改訂によって、音楽科目の中で「器楽」と「声楽」の履修条件が大幅に変更された。取得単位数の上で変更は見られないが、その方法、特に

必修とする年限の削減が大きい。このことによって、我々は、学生の音楽技術が低下するのではないかと心配してきた。子どもの前に立った教育者が、自分の演奏力や指導力の不足から音楽指導を嫌うことがあってはならない。そこで、文学部完成年度を迎え第1回卒業生を教育現場に送り出すに当たり、期間の上では軽減されたが、その分、1年間に履修しなければならない内容が濃くなった「器楽」授業を、学生がどのように受け止めていたかを調査してみた。

この集計結果に見られる学生の意見を反映させながら、これからの「器楽」授業のあり方(履修年限、内容、方法など)について追究してきた。その結果、次のようなことが今後の課題としてあげられる。

① グレード制の採用

学生の技量や進度に合わせた指導によって、音楽をその字が示すように楽しいものとし、必修期間が終わり選択となったとき、放棄することのないような授業体制を整えたい。

② 電子楽器による集団レッスンの実施

全くの初心者を対象としたとき、短期間で指導効果をあげるためには、従来通りの個人レッスンも疎かには出来ない。しかし、集団レッスンによるアンサンブルの楽しさや創作の経験なども与えることが、これからの教員養成には必要なことである。

③ 卒業生を対象とした追跡調査

教育現場に出て活躍しだした卒業生に対し、在学中に履修した「器楽」授業内容が実際の指導でどのくらい役に立っているかを聞き、その意見を参考にしながら一層充実した授業内容の作成をしていく。

以上の課題を踏まえ、今後も「器楽」授業のあり方を追究し、効果のあがる指導をしていきたい。

参 考 文 献

- 1 藤崎文夫他 名古屋女子大学 紀要 第27号 昭和56年3月 p.189